

## 〈地域調査報告〉

## 気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録 (I)

相澤卓郎<sup>1</sup>・齋藤良治<sup>2</sup>・土取俊樹<sup>3</sup>・梅屋潔<sup>4</sup><sup>1</sup>東北学院大学教養学部地域構想学科, <sup>2</sup>山形県立新庄神室産業高等学校, <sup>3</sup>神戸大学大学院国際文化科学研究科博士前期課程<sup>4</sup>神戸大学大学院国際文化科学研究科

## I はじめに

高倉浩樹東北大学東北アジア研究センター准教授を代表として、東北大学東北アジア研究センターを母体とする無形民俗文化財の被災後の実態調査プロジェクトが立ち上がったのは、2011年11月1日のことである<sup>①</sup>。本事業は宮城県からの委託事業で、文化庁の「地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」の一環であった。実際の調査は全国から集められた研究者を主調査者とし、県内の院生・学部生からなる補助調査者を連れた2名以上での調査が行われることとなった。東北学院大学からは文学部の政岡伸洋教授が副代表として、教養学部の金菱清准教授、植田今日子専任講師が名を連ねている。補助調査者としては、文学研究科の沼田愛と星洋和、教養学部の小山悠がいた（相澤は欠席）。すでに東北大と東北学院大のふたつの事務局、そして宮城県庁文化財保護課で構成された実行委員会により、三つの基準（A：既存調査地、B：被災状況を鑑みた重点調査地域、C：民俗文化財に関するデータが希薄な地域）で選定され、候補地はあがっていた。「仮に」とのことだったが、全員の調査候補地も貼りつけられていた。

本稿の執筆者の一人である梅屋に割り当てられた対象地域は気仙沼市だった。当初は別の地域が割り当てられていたが、希望により気仙沼市に変更された。その経緯については〔梅屋2012a〕に詳しい。気仙沼を希望したのは、実際の調査に当たって、何よりも震災前の姿を候補地のなかで一番よく知っている、ということである<sup>②</sup>。かねてからさまざまなかたちで協力を仰いでいた東北学院大学後援会気仙沼本吉支部の協力が今回もあてにできると踏んでの

ことでもある。

気仙沼市からは、梅屋の選んだ鹿折地区のほか、植田の担当する唐桑町宿、本吉郡小泉が選定されていた。

2011年度の第一次調査（2011年12月27日～31日）には相澤卓郎が補助調査者として参加した。第二次調査（1月27日～30日）には星洋和（東北学院大学大学院文学研究科）が補助調査者となった。2012年の第一次調査（2012年7月13日～16日）には、相澤のほか、地域構想学科2期生で人間情報学研究科修士課程修了生である齋藤良治（当時の肩書きは、東北学院大学地域構想学科金菱清研究室ティーチングアシスタント）、土取俊樹（神戸大学大学院国際文化科学研究科博士前期課程）が加わった。また第二次調査（8月5日～8日）、第三次調査（2012年11月22日～25日）、第四次調査（2012年12月29日～2013年1月1日）の補助調査者は、相澤、齋藤であった。ここでは、調査資料を時系列的にくまなく採録した記録を報告する。本稿はそのうちの第一部である。

## II 2011年度第一次調査（12月27日～31日）

## 1. 鹿折公民館へ（12月28日）

まずは、小谷竜介氏（当時宮城県庁文化財保護課）が、震災前から交流があったという浪板虎舞保存会の小野寺優一氏（1944年生まれ）を訪ねた。実行委員会によりあらかじめ「基準C：民俗文化財に関するデータが希薄な地域」として挙げられていた「浪板虎舞」の現状を知るためである。氏は同保存会の幹事長であるが、鹿折公民館長でもある。

仙台市の農協JAに長く勤めた方で、在仙時には俳優八名信夫の主宰する「悪役商会」に登録し、俳優業もこなすという異色の経歴を持つ。退職ととも

に気仙沼に帰り、鹿折公民館長となった。訪ねた場所は、鹿折公民館だが、公民館は津波で流されたので、鹿折小学校校舎の一角を間借りする形で仮に設置されていた。

## 2. 鹿折八幡神社のオサガリ（12月28日）

幅広い活動で知られる「浪板虎舞保存会」であるが、その活動のうちでもっとも重要なものは、多くの民俗芸能と同じく神社への奉納である。市内北部に位置する鹿折地区、旧鹿折村の村社である鹿折八幡神社。毎年行われる例大祭の中心は、「八幡様のオサガリ」と呼ばれる神輿渡御である。神輿の担ぎ手はロクシャク（陸尺）と呼ばれ、鹿折川河口域の4地区の当番制で担当する。中才、浪板、蔵底、東八幡の順でロクシャクは担当が順番にまわり、この持ち回り当番のことをトーマー（当前か）と呼ぶ。これ以外に、シカハマ（四ヶ浜）と呼ばれる4地域（大浦、小々汐、梶ヶ浜、鶴ヶ浜）は神輿が海上を巡幸する際の船を出す。八幡神社を出発した神輿は鹿折地区内を渡御し、鶴ヶ浦まで行く。この後、神輿は船に乗せられ、気仙沼湾内を巡幸して陸に上がるとまた鹿折八幡神社まで北上する。神輿が渡御する道程には「オヤド」と呼ばれる休憩所が計18ヶ所設けられており、その接待をオヤドにあたった家で担当する。オヤドではかつてホウゲ（宝桶）という専用の器を用いて料理を振る舞ったという。イッシュウ（一升）ボケ、ニショウ（二升）ボケなど容量によって種類があった。戦時中は米不足で、ホウゲの出番もなかったようだし、古い家格の象徴だということで若い人が反発して壊したりしたので、最近では使わない。

このうち浪板地区がロクシャクを担当する際には、その前夜祭にて虎舞が奉納され、神輿渡御のお供をすることとなっている。浪板地区に伝わる虎舞には、次のような伝承が残されている。享保三年（1718）に気仙沼から江戸へ向かった船が消息を絶ち、鹿折や大島の船乗りの家族は毎日亀山に登ってその安否を祈ったが、そのうち諦めて山上に慰霊の松の木を植えた。ある時、この松の木の下で一匹のまだら模様の猫が踊るのを見ると、しばらくして船

が無事帰港した。このことから、浪板地区では「虎は千里行って千里帰る」の縁起にちなんで虎舞を奉納するようになった。もとは家督を継ぐ者（当地では単に名詞で「カトク」と呼ぶ）のみが虎舞の伝承と披露とに関わることができたが、地区を離れる人が増加したことでその担い手を確保することが課題となった。1966年（昭和41）に保存会が結成してからは規約が制定され、「火曜の会」という集まりがあったが、こちらは当初より活動状況が不明確であり、まもなくして休止状態となる。2002年（平成14）からは虎舞の活性化を訴える声があがりだし、毎週火曜に笛と太鼓の練習が行われるようになった。女性が太鼓を叩き始めたのもこのころである。小野寺優一氏は、この虎舞保存会活動の活性化の立役者でもあった。よく知られるように、地域興しでは、よそ者と並んで一時的に地域外に出て戻った者が活躍する傾向があるが、小野寺氏もある意味では後者の典型であろう。

東日本大震災で鹿折地区が受けた被害は甚大である。湾に流入する鹿折川を遡上して広域にわたって浸水した。この時、気仙沼湾に停留していた船が陸地にあがり、その一部は最近まで鹿折地区内に残っていた。（長い議論の末最近になってようやく解体がはじめられた有名な第18共徳丸もそのひとつだった。）さらに、津波の後に石油コンビナートの燃料タンクから漏れ出た油が原因となって火災が生じた。浪板虎舞保存会で震災による犠牲者が出たのは前幹事長で顧問、会計兼副会長夫妻。副会長は保存会規約により自治会長が務めることとされていた。浪板地区の被害者は計23名におよんだ。

鹿折地区の住民は、その多くが仮設住宅での生活を送ることになったが、浪板地区の住民は216戸全戸が戸籍上そのままであり、現在でも全員が虎舞保存会の会員と位置付けられている。小野寺氏によれば、震災後のオサガリ実施に関しては、2012年度担当となっていた浪板は担当可能だが、蔵底で大きな被害を受けたため、トーマーの持ち回り順が崩れる可能性もあるということだった（2013年現在、再開のめどは立っていない）。

### 3. ヒワタシのオトシトリ（12月29日）

2011年の年末調査では、同時に震災後の正月飾りの飾り付けに関する聞き取りも行われた。これは調査日が年末になることを逆手にとって、県内では例年12月30日ごろに行われる正月飾りに関して聞き取りを行ってはどうかという小谷氏の提案によるものである。

正月飾りの調査に関しては、市内の多くの住民が仮設住宅での生活を余儀なくされたこともあり難航することが予想された。「井戸端」<sup>③</sup>という屋号をもつ小野寺優一氏宅でも、氏の家が流されたこともあり、母屋に三つ揃えの松、7本の注連縄を飾り、離れに二段の松と5本の注連縄、水回りに3本の和、また井戸、風呂、離れの水道、トイレ、自動車・自転車、耕耘機、臼、若水迎いの桶など10数ヶ所に施していた正月飾りができなくなり、市販のものを用いた簡易的なもので済ますということだった。

そんな中、小野寺氏の紹介で調査に応じていただいたのは2軒の家だった。1軒目は浪板虎舞保存会会長の昆野文男氏（1933年生まれ）宅である。同行した相澤は、気仙沼市内の階上に祖父母をもち、昆野家とは「シンルイ」であった。このことも大いに調査の潤滑な進行に貢献した。

昆野家（屋号は日渡（ひわたし））はかつて塩田の肝煎を務めた家で、文男氏で数えて16代目になる。父も祖父も婿養子であったため、なかなかシュウトオヤとの関係が難しかったと聞いている。祖父が芸達者だったため、父はしょっちゅう歌を歌わされて参ったという。

震災後は、浸水し一部損壊した家を修繕しそこに暮らしている。もともとは、海苔、牡蠣、コウナゴ漁などを家業としていたが、チリ沖地震（1960年）の津波があり、その翌年（1961年）船を売って漁師を廃業し、水産加工業を始めた。文男氏の代からは鯉節加工に着手し、日渡水産として経営を始めた。日渡水産は震災以前から気仙沼市内に3軒残った鯉節加工場の1軒である。2011年7月8日で満50年になるので、2月には歌津の柏崎荘で新年会を行った。漁はやめたが、ベッカ（別家：分家）が高田で船団長をしている関係で、宴席では思いもかけない上席

を用意されることが多い。家印は山に力。

2011年の正月飾りは、例年より早く12月28日のうちに済ませていた。神棚も無事であるので、これに続く行事も例年に近いものはしたいと考えているという。正月には七房のついたしめ縄、スカシ、（紙の）網、星の玉（ほしのたま）を7枚セット（ほかに5枚セット、3枚セットがある）になったものを天照皇大神宮の札と一緒に八幡神社から選ばれた総代役が12月1日に祓いを受けてもらってくる。星の玉は、松竹梅や万両カブなどと一緒に海老が描かれたもので、めでたいことを表す。父の代でしめ縄は自分でつくるのをやめたが、昔は自分でつくっていた。しめ縄から垂らす房は、左から7、5、3、5、5、3、5、3、3と垂らしたものだ。星の玉は市内の新城の引退した元漁師がつくっている。「開運福祿寿」のスカシは、八幡神社宮司の齋藤獺（ばく）氏がつくったものである。仏壇の左にしめ縄、その下には星の玉二枚、右に紙の網と御幣、下には左から星の玉三枚、大国主。右正面上には恵比寿大黒が祀られ、その下には、事代主、星の玉二枚、「大漁」「満作」「千万両」「餅」「宝船」窯神を貼る。その上にはお守りをおさめる棚があり、長磯の穂葉（あきば）神社、巖島神社、八雲神社、成田山新勝寺の札がある（家の4代目の人が成田に参ったときのものだから飾っている。現在ならともかく当時成田山に参るのは大変だったろう）。家には4つ神棚があり、それぞれ天照皇大神宮、大年神、恵比寿・大黒天が祀られている。4つめにはお札を飾っている。4つの神棚ではそれぞれ飾り付けが異なる。それぞれ飾るものは異なっていたが、御幣束とスカシは共通して飾っていた。

31日と1日は、床の間でお膳を囲む。オガミゾナエといって箕にお餅をふたつ入れて松の枝を乗せて四方拝して餅を切り、囲炉裏で焼く。供物台には、松の枝と赤と白の幣束が置かれており挨拶に来た人のお祝いをそこに置くことになっている。赤い幣束は1月12日に山に供え物とともにオハネリ（お米）を蒔いて山で拜む。1日に若水汲みをしてそれで料理の支度をする（昔は若水桶を使ったが現在はあるものを使う）。現在は行わなくなって20年以上になるが、3ヶ日はまめがらの火で竈を炊いた。4日に

ヤマイレ（山入れ）といい、山でオハネリを蒔いて芝刈りのまねをして松の枝を持ってくる。6日はツメリユ（爪切り湯）、7日は七草、11日は農ハダデル（はじまる）といって、農作業をはじめる日である。ヤマイレで持ってきた松の枝は、新年初めての雷の日（ハツライサマ：初雷様）にマユダマ（繭玉。1月13日から20日ぐらいまで飾る）の一部と一緒に燃やす。20日はマユダマガユといいマユダマを降ろし、粥を食べる。昔は濡れ縁だったので、杉を切ってきて濡れ縁におき、しめ縄など正月飾りをそこに掛けておいた。昔はその杉を秋に稲掛けにした。カレイ（家令）として葉っぱは6日まで、つまり七草が過ぎるまでは食べない。肉も七草まではまず食べない。1日朝夕、2日朝夕、3日朝夕、5日朝夕、9日朝夕、11日朝夕、12日朝夕、15日朝夕、19日夜、20日は朝夕（マユダマガユ）にお膳が出る。

元日は菩提寺である興福寺と宗旨は違うが浄念寺、そして八幡神社に参って新年会に顔を出す。浄念寺には、100年前に当家に居候していた「300年インキョ」と呼ばれていた人が浄念寺で弔われているので、拝みに行く。あちらこちらを渡り歩き、あちこちで過ごした年数を足すと300年になってしまうということでその名がついたそうだ。5日にはお寺が年始の挨拶に来る。住職は、日渡のほか、西城（屋号）、小野良組（屋号）など寺が開基のときの檀家5軒に挨拶に行くという。日渡は現在護寺会の副会長をしている。

震災当時、昆野氏は市内（市街地）にいたという。工場で加工するための原料を運搬中に被災した。当時工場では16名（うち2名は実子）が働いていた。津波が来るのはわかっていたので、従業員は自宅に帰し、息子に工場の真空包装機など高価な設備をフォークリフトで避難させた。魚市場が見える裏の山（地所）に家族4人ほどで登り、海の方を見ていた。なかなか来なかったが、栈橋が見えるくらいに海水が引いたかと思ったら、一丈（約3メートル）ほどの高さの津波が襲ってきた。コンテナや船が波に流され、外洋に逃げようとした船も内湾に押し戻され、約20キロぐらいの速度でぶつかり合いながら渦を巻いていた。川沿いに遡上した波に乗せられて川の上

流に流された船もあったようだ。引き波の威力は強く、家々の屋根がながされていった。内栈橋は流されて唐桑の小鯖に流れ着いたという。

伝聞で自宅にも水が入ったことを知った。当初はサッシの半分ほどと聞いていたが結局屋根まで、290センチほどまで浸水した。水はすぐ引いたので家がさほど傷まなかったのは幸이었다。自動車は4台あったが、軽トラック1台は家の中へ、乗用車（カローラ・アクシオ）は玄関の土間に入っていて、2トントラックが家の中まで流された。どうも津波は山の尾根伝いに杉林を通して自宅に至ったらしい。

後で聞いたところでは通りから自宅に入る入り口にある須賀神社にも避難した人々があり、神社の幟を体に巻いて寒さをしのいだ人もいるという。

家は、外見こそ一部損壊であったが（判定は半壊）、内部は津波で家具が倒れ、泥まみれだった。現在では、ボランティアや親戚に清掃してもらい以前のように暮らし続けている。のべ20人のボランティアがヘドロなどをかきだして清掃してくれた。

4棟あった工場はばらばらになってしまった。工場では鰹節、なまり節、イカの塩辛の下処理を行っていて、特に鰹節は評判が良かった。手を抜いていないためであろう。今年も郡山や塩竈などから、「今年のお歳暮に鰹節はないのか」という問い合わせが相次いだ。

今回の災害で中学高校の同級生が5人亡くなった。なんやかやで仕事が増えてきて、会計や長など仕事が回ってくる。出費も増えて大変だが、生きていられるのはなによりと考えて引き受けている。とりわけ会計関係の役が多い。八幡神社の氏子総代長もつとめている。

虎舞は飯綱神社でまず奉納をして、漁で生計を立てているところを回るものだ。須賀神社は150年ほど前から現在のかたちで崇敬されていたと聞いている。現在の別当は小野寺（屋号は岩城）、渾名は「50番」。タクシーをやっている。飯綱神社の別当は、長浜（屋号）。名字は同じく小野寺である。須賀神社自体は12、3軒の家の共有地であるが、ほとんどそういった意識はない。以前はカトクだけが関わっていた。兄が出ていたころには大阪万博で演じ

たそうだ。前会長の小野寺万治郎氏は芸達者だった。前前会長の小野寺伸男氏の代から市に無形文化財指定を働きかけていたが、なかなかうまくいかなかった。2006年になってようやく指定された。自分が会長になったのは、前会長が退任してから何人か候補が立ったが、あまりうまくまとまらなかったためである。「日渡しかいない」と推薦するひとがいたが、もともとはカトクでもなかったのによくわからないし、固辞していた。最後に井戸端（前出の小野寺優一氏）が幹事長をして支えてくれるなら、と総会で条件を出した。井戸端が了承したので引き受けることになった。

祭礼の時の会費は1,000円だが、お礼が700円で残りの300円で飲食費をまかなう。もともとは「ホウゲ」（宝桶）と呼ばれる桶に入れておにぎりなどを供したものだ。ホウゲは戦後米不足の時期に使われなくなったということだ。主立った家は8軒だが（①鳥越（小野寺）、②岩城（小野寺）、③浦島新屋（昆野）、④荒屋敷（熊谷）、⑤日渡（昆野）、⑥日渡の上（小野寺）、⑦高屋敷（小野寺）、⑧木下隣（村上））、そのうち、鳥越、岩城、荒屋敷、日渡の4軒は原則毎回主立った役割を果たす。浦島新屋、日渡の上も準備の中心に加わることもある。岩城と荒屋敷はエンルイである。

従来は、祭典への関わり方にも序列があったが、あるとき平等にしたほうがよいと主張する村人の一人が「ホウゲ」を打ち壊した事件があった。木下隣が仲介しておさめた格好となっている。

浪板1地区は6組に分かれており、かつては3組ずつ交代で役を果たした。現在では人口流出の影響でほぼ4組ずつになっている。多い組は11軒ほどになるが少ないところは5軒しかない。

震災の時、虎の頭の練習用のレプリカは蔵にあった。それもぬれたが無事だった。ホンモノは新しい頭を製作依頼していたために八日町の齋藤則男氏に預けていたので被害を免れた。現在ホンモノは芸能部長が保管している。

神棚の横に飾ってある古ぼけた掛け軸はかけっぱなしなので汚れて判別しにくいが鍾馭様である。あるときアメリカからきた機械で修復し、ようやくこ

こまできれいになった。祖母が小さいときに旅の六部が訪ねてきて、「こちらにある鍾馭様が厄災を祓ってくれている」と語ったと伝えられる。今回も水は鍾馭様の手前までしか浸水しなかった。何となく力になってくれているような気がして大切にしている〔梅屋 2012a: 268-272; 梅屋2012b: 254-262〕。

#### 4. オオイのオトシトリ（12月30日）

以前より面識があった尾形健氏<sup>④</sup>はどうするのだろうか、とOB会の庄司氏に電話で様子をうかがってもらった。庄司氏はシンセキで幼少時から尾形家に出入りしていた、と以前言っていたのを覚えていたからである。尾形家は旧家だったから、おそらくは同様におトシトリを大切にしているだろうことは容易に想像がつく。しかし尾形家の屋敷は流されてしまっている。風の便りにご無事であること、アパートに身を寄せていること、などは知っていた。

電話では、「すべて庄司さんから話は聞いています。オトシトリは、明日の朝10時頃からやります」との返事。意外なことに参拝を行う場所は、現在居住しているアパートではなく、津波の直撃を受けて屋敷が流された、その屋敷跡だという。

小々汐地区に住んでいた尾形家（屋号オオイ）での正月飾りは、例年通り12月30日に行われた。尾形家はかつてイワシ網漁の網元として栄え、現家督の健氏（1943年生まれ）で17代目になる。家屋はいずれ登録有形文化財への申請を検討していたほどの旧家であったが、震災により居住部分が倒壊、かやぶき屋根がかるうじて残った。現在では、貴重な文化遺産であるとして工学院大学 後藤研究室と国立歴史民俗博物館が設立した「気仙沼・尾形家修復保存会」の協力のもとSOC基金（東日本大震災被災文化財復旧支援事業）及び公益財団法人朝日新聞文化財団の助成を受けて部材の修復が進められている。

調査日となった12月30日には、我々の他にリアスアーク美術館副館長（当時）の川島秀一氏、ならびに国立歴史民俗博物館教授の小池淳一氏、成城大学大学院の加藤秀雄氏が集まった。

尾形家の正月飾りでは、明神さん、お天王さん（イワクラサンと呼ばれる）、金毘羅さん、三峰神社（オ

クマンサマと称される), 井戸神様, そして土蔵跡の計5か所をまわるものである。金毘羅さんの石鳥居は津波により倒壊し, 明神さん, 三峰神社の木の鳥居は震災後に発生した火災で焼失している。このような状況で, 尾形家の正月飾りは注連縄と幣束を合わせ簡略化したものをそれぞれ依り代とし, それを適当なところに貼り付けるというかたちで行われた。貼り付けた依り代に米を撒き, (これをオハネリという), 四方拝をしているようであった。先の毘野氏の場合にはあきらかに「四方拝」との発言が得られたが, のちに聞いてみると, 尾形氏の場合には, お参りするすべての神様の方角に加え, 金華山の方角を拜んでいるつもりだという。

これらの神様は, 尾形家のみではなく尾形家の別家などでも祀られていた。明神さんを祀っていた住居裏の山では松茸が生え, 採取可能な時期になると地区住民などが山に登ったともいう。しかし, 震災後に失われた鳥居などを元通りに修復するのは, 別当である尾形家の責任であると健氏は語る。尾形家は震災後, 市内のアパートに移り住んでいる。そこでは, 市販の注連縄を飾るだけの簡素なもので済ませたが, 小々汐の住居宅にはこの日, 健氏とその妻, ならびに息子の三名がそれぞれ分担して5か所での正月飾りを行った。

## 5. テンジョウのオトシトリ

近藤愛男氏は, 1930年(昭和5)生まれ。梅屋は同行がかなわなかったもので, 以下は相澤の報告である。

近藤家では, 年神, 恵比寿・大黒天, 大麻, 御幣束, スカシ, キリコを稲葉(あきば)神社から買っている。これは毎年地区ごとに相談して決められた係の人が持ってくるものになる(稲葉神社の例大祭は3月25日と10月25日。今年は10月25日, 例大祭の日に係の人が配布した)。値段は毎年300円払っているのだが, 特に決まりはなく払う人の気持ち次第で変動するという。星の玉は近くの農協で買っている。正月飾りの準備が始まるのは年末で, だいたい28日ごろからしめ縄を作り始める。神棚に飾るのは5本のしめ縄で, 他に玄関や井戸, 離れに飾り付けるも

のも作る。飾り付けには特に順番は決まっていない。飾る位地は, 向かって左側に年神, その右隣から順に恵比寿・大黒天, 星の玉を貼っていく。神棚の天井にはしめ縄, キリコを飾る。スカシは神棚の下に貼り付けていく。階上(はしかみ)地区のスカシは鹿折八幡のものとは異なり, コピーされただけの切られていないものである。神棚の上には御幣束や松の枝が飾られ, また恵比寿・大黒天の木彫りの像が置かれている。本来なら去年の飾りは撤去して捨ててしまうのだが, 今年は稲葉神社の宮司が津波で家を流されてしまい, 正月飾りの準備が出来ていないのだという。今年, 神社から買ったのは年神, 御幣束, 大麻のみで, 他のキリコやスカシ, 恵比寿・大黒天は去年のものをそのまま使用することにした。

飾り付けの最後には神棚に餅を供える。餅は二段のものを1つと数え, 年神の下に1つ, 神棚の手前に12並べる。12という数は1年を表してのことだが, 並べる数は各家で異なる。本来は大年神の棚には自宅をついた餅を供える。

飾り付けをおこなうのは昼過ぎから夕方間で, 終える頃には夕飯になる。12月31日から1月3日にかけては朝, 晩に神様に供える御膳を用意し, 神棚の下に供える。31日に午前中に並ぶのは基本的にナメタガレイの煮つけ, 刺身, ご飯とお吸い物, そしてお神酒になる。夕飯に並ぶのはこれと全く同じ内容で, 神様と同じものを自分たちも食べることで厄災等を祓おうということである。正月の期間も, 基本的に自分たちの食べるものと同じものを供える。

玄関や離れなどの飾り付けは午前中のうちにおこなう。玄関には5本のしめ縄と松, 井戸と離れには3本のしめ縄を飾る。近藤家に井戸が出来たのは昭和32年3月のことで, それまでは近所の家から水を貰っていたので, 以前はそこにも飾り付けをしていた[相澤 2012: 267-268]。

その年の調査予定を終えて, 気仙沼市出身のイオン東北代表の村上教行氏らのリーダーシップでいち早く復興したイオンを訪れてみると, そこは正月飾りや新年の餅, 酒などを購入する市民で意外な賑わいを見せていた。ほっとするとともに, この地域の人びとがいかに年越しの行事を大切にしているか

を痛感せずにはおれなかった。

### Ⅲ 2011年度第二次調査（1月27日～30日）

#### 1. 鹿折八幡神社社務所（1月27日）

小野寺優一氏にはしきりに飯綱神社での「初舞」見学を薦められたが、当日は大学入試センター試験であり、試験監督業務のため梅屋は気仙沼を訪れることはかなわなかった。その間の様子は、小谷と相澤が記録している。

市民の悲願であった大島架橋の建設計画変更の説明会のために「初舞」開始は2時間遅れ、しかも昆野氏などは復旧予定の水産加工場と大島架橋の取り付け道路が一部重なっていることを知り、困惑していたという。工場復旧は復興計画をある程度役所と相談したうえで着工しているものだが、今回別の変更案が提示された。話し合いが必要だが、役所の管轄違いのためかなり苦勞しているとのことであった[相澤・小谷 2012: 269-270]。

さてわれわれが電話で約束の刻限に鹿折八幡神社社務所を訪ねると、鹿折八幡神社宮司、齋藤漠氏（1937年生まれ）と、齋藤良子氏（1938年生まれ）とともに迎えてくれた。すでに前回尾形氏がスカシなどを受け取りに来た時に川島秀一氏や小池淳一氏とともに社務所を訪れており、面識はあった。かつては市役所につとめており川島秀一氏の上司だったこともあるという。

震災当日は神社にいたという。鹿折川を遡上した津波は神社の前の通りまで到達し、自分の身長から推計すると道路から180センチほどの高さにまで至った。在宅していた近所の人々はみな本殿までの階段を上って非難し、3日3晩社務所兼住居であるここに滞在していた。

実感としては震災前に1800軒、約2500世帯あった氏子が、600戸ほど、3分の1に減った感じだという。正月飾りなど、300戸分は各戸に持参したが、記録によれば以下のように激減している。平成22年（2010）に大麻は2174戸だったが、平成23年（2011）には1202戸に減少。幣束は、1677から776へ。恵比寿・大黒は、1316から676へ、年始は320から180へ。神遊は今年80にすぎなかった。

この神社に奉納されるのは、浪板虎舞のほか、ニシハチ（西八幡前）に最近（10年ほど前）できた八幡太鼓（後出）、中オうちばやし、などがあるが、「むっつけ八幡」とよばれ、へそ曲がりが多く、それほど何かに「ハマル」（熱中する）ことがないので盛り上がり欠ける地域でもある。

宮司が被災したため、正月の幣などの配布に支障をきたしている事例もよく耳にしている。階上（はしかみ）、長磯の近辺の秋葉神社宮司の榊原氏、大谷海岸の近くの本吉の滝上神社の大内是明氏などがそうである。

鹿折では、星の玉（ほしのだま）は、東八幡前で書道をしている佐々木和男氏が書いたものを使っているという。ほかにももう一人いるようだが、このあたりでは彼が書いたものを使うのが一般的であるとのことである。開運福祿寿のキリコは、先代の宮司、齋藤富雄氏がはじめたものだ。お札やキリコ、カキダレなどはすべて神社で作成する。

中オがトーマー（当前）の際、中オのうちばやしは、神輿渡御についていくが、鶴ヶ浦まで着いたら、トラックで引き上げているようである。浪板の虎舞が船に乗ったかどうか、よく覚えていない。例祭ではなく、べつの時ではないか。四ヶ浜がロクシャクになっていないのは、歴史的経緯があったと聞いている。自分たちはロクシャクはやらないがその代わりに船を出す、との取り決めとなったといわれる。しかし自分が子供のころはすでにトーマーがあったので、それ以前のことであろう。

ところどころの休憩所をヤスミバ（休み場）とかオヤド（お宿）という。平成22年の例では、18ヶ所のオヤドがある。ロクシャク（陸尺）全員分の御膳と酒を準備してもてなす。一か所10分から15分ほど。指名されるのは名誉なことであるが、出費もかさむ。

以下の家が中心的な役割を果たす。北から、①では、幣束のヤドである「木戸脇」（屋号。以下同じ。藤村定光氏宅）、「久保」（畠山修太郎氏）らが協力して準備する。②両沢では、「仁井屋」（齋藤久夫氏）、「善茶屋」（齋藤清氏）、③一本杉（地名）では、岩井和朗氏と白山商店、そして佐藤良治氏、④の鹿折

八幡神社近辺では「森ヶ口」(村上麗子氏)、「東(ひがし)」(東(あずま)一郎氏)、「杉の下」(小野寺基氏)、「山田」(小松毅氏)、⑤大橋では、「洞」(村上俊一氏)、⑥油茶屋(地名)では「西城」(小松幸雄氏)、⑦十文字目では新しい家が多いので協力してやっているようだ。⑧過去総代長だった「高橋商店」(別名カネショウ。フカヒレを扱っているという。高橋勇夫氏)、⑨「吾妻商店」(水産加工業。吾妻忠男氏)、⑩は消防会館。⑪飯綱会館では別当の「長浜」(小野寺司氏)、「井戸端」(小野寺優一氏)、「田中」(小野寿子(としこ)氏)、「マチカド」(小野寺力氏)、⑫浪板2地区では、「日渡(ひわたし)」(昆野文男氏)、「鳥越」(小野寺氏)、⑬大浦では、「オオイ(大家)」(小野寺富士郎氏)、「長浜」(小野寺司氏)⑭小々汐では「オオイ(大家)」(尾形健氏)、⑮梶ヶ浦では「丸川」(畠山則雄氏。ここは宝洋水産としても知られる。長男の司氏は後を継がず、高松商店の向かいに居住)、「釜崎」(小松一貞氏)、最後の鶴ヶ浦(⑯)では、「オオイ(大家)」(小松克光氏)、「宮の前」(小松武雄氏)、「オミタケ(御御嶽)」(小松正太郎氏)。⑰、⑱については、⑩の消防会館同様、新しい家が多いので旧家が中心となっているというよりは自治会組織で行っているようだ。

鶴ヶ浦の両小松家は、宮司の一族で、それぞれが本家だと主張している。また、正太郎氏が齋藤氏の父富雄氏が八幡神社の宮司になる以前に神職として神事を行っていたという。自分なりに系図をつくってみた。それによると、八幡神社(常覚院)としては初代千住坊泰永から数えて、途中血脈は途絶えているが第18代目、八雲神社(婦命院)としては、初代永心から数えて19代目に当たるといふ(図参照)。

また西八幡前の高倉暁氏の家は「八幡寺」を名乗り、正月の幣(ぬさ)も3本別だてのもので、一軒だけ特殊なものである。初めは信用していなかったが、八幡神社の碑に「八幡寺」の記述があったので本当らしい、と考えるようになった。

## 2. 飯綱神社別当(1月28日)

すでに昆野氏から飯綱神社別当である「長浜」(屋

号)のことは聞いていた。小野寺司氏(1955年生まれ)と、その姉小野寺秀子氏(1951年生まれ)が、長浜の屋号をもつ、飯縄神社別当である。変則的だが、現在この姉と弟が「長浜」となっている。先代は大浦にいたが、最初飯綱神社横に娘に婿をとらせて一家を営ませ、のちに弟は大浦の屋敷を継承することとなった。

指定されたのは飯縄神社脇の長浜建設である。秀子氏の夫、洋治氏は階上から婿入りした。震災当日津波のビデオ撮影を自宅隣の飯綱神社付近からしたことでも知られる。

司氏は、本吉響高校教諭。大浦の小野寺家に住んでいた。3月11日のことを次のように回想する。

高校の定期試験は10日で終わっていたが、面接など他校にない科目の採点のため、休校で生徒はいなかった。本来は採点が終わってから家庭訪問に行くつもりだったが、早く終わったので帰る途中だった。本吉から室根経由で大浦を目指したが、大浦は火の海。鹿折トンネルで引き返し、夜10時ごろには市役所のワテンビルにいた。病院で入院中の父親の無事を確認して新月のオジの家にお世話になった。それは14日のことだと思うが、その間のことはよく覚えていない。もともと15日から入院予定だったので、入院してしまおうと思ったが、拒否されたのでオジの家に行ったようだ。最近学校でも3・11に何をしていたのか、という作文課題を国語の教員中心にまとめている。学校が休みだったのでいろいろなケースがある。防災マニュアルを策定すべきだと県にも市にも進言している。

今回、震災で神棚を失った家に対し、木製の神棚が八幡神社から配布された。財源は神社庁だと聞いている。

長浜屋敷と呼ばれる屋敷が飯綱神社の裏手にあった。ながらく浪板の塩田の肝煎りであったらしい。津波で流れたが、租税を塩で納めた記録が残っていたようだ。気仙沼市史編纂室の調査員が熱心に調査していた(文化財担当の小野寺昭英氏のこと)。川島秀一氏も来ていたのを覚えているが彼はもっぱらイワシ漁のことを調べていた。平成3年(1991)に亡くなった祖父が、インタビューを受けていた。

家系図もあったが、系図屋あるいは調査会社に作成依頼して購入したもののようだった。それによると、司氏で17代目にあたる。長浜屋敷にまつわる民話もあるようだが、ラジオでたまたま耳にした程度で、詳細は思い出せないという。大浦には「大家（おおい）」「小浜（こばま）」という旧家があるが、そこよりも古い、という人もいる。火事で文書が焼けており、今度の震災で新しいものも津波で流されたので、書かれたものは残っていない。おそらくは（酒ともいわれるが、不確定）、財産を失い、大浦長浜という、浜があったところに移転したものと思われる。大浦の屋号にも「長浜の上」など、長浜にちなむものが多い。その時に一対の金無垢のお稲荷さんの本尊（権現とも称される）を売り払ったとみえ、現在では秋田の医師がそれを所有しているという。現在のご神体は、コンクリートのようだ。飯綱神社には、「葉山」の碑もある。

ながらくトラカッシャ（虎頭）をするのは「鍛冶座（かんだ）」という屋号の小野寺万次郎氏の家である。その弟が塩辛など水産加工業「株式会社小野万」を興した。二代にわたってそこから嫁が来ているので、縁続きではある。万次郎氏の息子、哲郎氏が、長らくカッシャをやっていた。現在では誰でもやるようだが。あの家には氏神もある。

もともとは、地域の人しかかかわることができなかったが、笛を吹いている小野寺一良氏がPTA会長の時に、子供たちやその母親を巻き込んでいくような形になったのだと思う。演芸部長の小野寺信義氏が若いうちからかかわっているので詳しい。ただ、別家の別家で遠慮があるようだ。

大浦に関して言うと、「オオイ（大家）」「コバマ（小浜）」という中心となる本家があり、その別家との関係が伝統的儀礼で表出する、といわれる。

我々も婿を取って23年前にこちらに転居してくるまで、初舞などはしなかった。10数年前ぐらいではなかろうか。旧正月に行っていたはずである。正月は浪板一区で16組ぐらいで神輿巡行の際は、地区の班から一人ずつ出る。神社の係もある。最近虎舞がしょっちゅう回っているのは、花を求めるためもある。

大浦にも戦前までうちばやしがあり、伝承者もいたので復興の機運が高まったこともあるがうまくいかなかった。

婿である小野寺洋治氏が育った階上にもうちばやしや虎舞があるが、虎舞にはバカシはいない。いつだったか怪我したとかなくなったとかの事故があり、とりやめになったらしい。浪板でも昭和の時代、みなとまつりで梯子から転落して死亡者がでたことがある。

オヤドでは、現在は婦人部が中心となって、仕出し、塩とごまのおにぎり、お吸い物、煮染め、刺身などを出す。昔は4,5軒が中心となってハウゲ（宝桶）という朱塗りの桶におにぎりを入れて出した。ロクシャクたちに酒とビール、そしてまれには焼酎なども振る舞う。八幡神社のオサガリと、八雲神社（お天王さん）のお祭りの二回行う。他のオヤドでは、パンがでたりするが、浪板にオサガリするのがちょうどお昼時であることもあって、比較的しっかりした食事を準備する。太鼓がなると出発しなければならないが、浪板では皆腰が重い。そうでないともてなしが不十分だということにもなる〔梅屋 2011b: 274-275〕

### 3. 浪板虎舞保存会（1月29日）

浪板虎舞保存会幹事長であり、鹿折公民館長でもある小野寺優一氏を再び訪ねた。

私（小野寺優一氏）は高校卒業後、仙台の短大を出て、宮城県農協中央会に26年間勤めたが、田んぼの手伝いには戻ってきていたし、4年に一度の浪板のトーマーには帰ってきてロクシャクをしていた。昭和45年（1970）の万博も宮城県代表に浪板虎舞が選ばれ、特別休暇が認められ、欠勤扱いとはならなかった。

昆野文男氏の兄（昆野洋士雄氏）と一緒にいった。洋士雄氏は、かもめ通りでミッキー靴店を開いている。私の父の同級生で東京靴店に勤めている者がおり、そこで勉強したと聞いている。

私は小学校2年からバカシをやっており、3人兄弟、二人姉妹の第二人ともがバカシをやった。上の弟は横浜におり、一番下の弟は白石高校の校長をしてい

るので現在は関わっていない。現在は主に小野寺厚也氏がやっており、場合によっては自分が老骨に鞭打ってやることもある。小学校3年総合学習で指導しているが、「浪板に住みたい」という感想を漏らす生徒がいるなど、反応はよい。

カッシャ（頭）は、かつて小野寺慶治郎氏がやっており、その弟子万治郎氏のカッシャと私のバカシのコンビが長かった。私の父と万治郎氏の父親はイトコなので、縁もあった（祖父の妹が万治郎氏の父に嫁いだ）。その後、小松武氏（しのぶ館の当主（大本家））がカッシャをつとめ、その後小野寺哲郎氏がつとめたが、現在は養成中。

小野寺氏が参考にと論文の写しを出してくれる[太宰 2001: 69-71]。記事には頭は明治2年に製作とあるが、昭和8年と12年に鉄道省の物産展に出演しており、そこから逆算すると、明治後半か大正の作ではないか。大島の宮大工が桐で製作し、故人である小野寺図工（じこう）氏が色を塗ってくれた。二個目の頭も練習用として、あるいはみなと祭りなどでは使用することもある。八日町に興味で窯神を製作している斎藤典夫（のりお）氏に新しい頭の製作を依頼し、ホンモノは預けていた。作業場である蔵にあげたばかりのところを津波が襲い、すんでのところで被害は免れた。現在下あごはまだできていない。今後の行事として4月8日に横浜での公演があり、8月にみなと祭りがある。みなと祭りでは新しいカッシャがお披露目できるのではないかと。現在、腕のいい塗り師を探している。二つ目のカッシャを塗ったのは、小野寺図工氏の弟子の黒百合画房の小野寺氏だが、一体目のような微妙な色使いは実現できていない。みなと祭りには60回連続参加している。今年は震災でみなと祭りは行われず、みなと祭り実行委員会は鹿折地区では鎮魂の意味を込めて盆踊りを開催し、そこには虎舞は出演したので連続出場は継続しているともいえる。

市の指定無形民俗文化財の保存費では、修繕費捻出は難しいので積み立てている。最大100万円ぐらいを見こんでいる。宝くじにも250万の助成を得て、太鼓を作ってもらった。住友など財団からもいくらか費用をいただいている。

今後のことは、まだ決まっていないが、村上俊一氏と相談してトーマーだけでなく地域を挙げてやっていこうと考えている。現在の総代には3年前に小野寺修一氏と小野寺利勝氏を推薦した。ちょうど社務所の建て替えに当たっていたので、役員として寄付を一般の家より余計にしなければならなくて、気の毒だった。推薦した責任から私も役員並みの寄付をした記憶がある。

#### IV 2012年第一次調査（7月13日～16日）

##### 1. 神戸大学震災復興事業サポート経費

2012年の7月13日より、我々は再度の気仙沼調査を実施した。本調査は前年度同様に「地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」の継続事業であると同時に、神戸大学でも「東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費」と銘打った同様の調査事業が立ち上がったことによるものである。岡田浩樹教授を代表とし梅屋潔准教授を副代表とする同事業の「要求書」によれば、概要は次の通り。

「東北大学等の学生とともに地域住民と協力しつつ共同フィールドワークを行い、フィールドワークの技法の伝授、また阪神淡路大震災からの復興プロセスとそのプロセスの記録方法や技術、淡路における風評被害の克服のプロセス、破壊されたコミュニティの再構築などの知識を伝え、自助的な復興のサポートを行う。」また、目的は、以下の通りである。

「コミュニティ復興のプロセスに関するフィールドワークの技法、資料整理、検討作業を地域住民の協力を得ながら、地元学生および東北大学等の教員と共同で行う事により、今後の自助的な調査をうながすことを目的とする。また得られた資料は、東北大学等の研究教育機関、地方自治体、地元住民に還元するとともに災害復興研究の基本的資料として蓄積し、現地学生・地元住民がコミュニティ再構築のアイデアを生み出す学術的・社会的資源とする。」

この枠組みに従って、調査者も前年度に引き続き相澤と梅屋、加えて土取俊輝、地域構想学科および人間情報学研究科OBでもある齋藤良治を交えての調査となった。調査にあたって東北学院大学同窓会

気仙沼本吉支部の庄司幸男、佐藤仁一両氏の協力を受けている。とりわけ、庄司氏に関しては市内の民俗芸能保存会の中から調査対象となる団体を選び出していただき、さらには調査日程まで組んでいた<sup>⑤</sup>。

庄司氏、および市教育委員会や気仙沼文化協会の助言もあって、早稲谷など、いわゆる「山手」とよばれる沿岸から比較的距離があり、津波による直接的な影響を受けなかった地域にも調査に訪れることになった。調査は7月の予備調査を皮切りに、8月と11月、12月の計4回にわたって行われた。実際の調査日程は別表の通りであった（別表）。

## 2. 中才打ちばやし保存会（7月13日13:00）

「東中才一振興会館」で応対してくれたのは、佐藤良治氏と、西村清氏。2007年度に実施された地域構想学科の「発展実習」で、梅屋と齋藤は両者に面識はあった〔佐久間・梅屋・金菱編 2008〕。

打ちばやしは戦争の影響で昭和15年に一度途絶えているが、昭和22、3年ごろ復興の機運が高まり、昭和26年4月に、保存会結成というかたちで復興した。これはちょうど鹿折が町村制を引いたときにあたる。かつては伝統芸能が「盗まれる」両中才住民以外の参加は拒んでいたが、現在では会員不足もあって、住民だった方で転出した方も認めることになり、現在では賛同する方は誰も、ということになって縁がない唐桑の保存会員もいる。毎週水曜日7時から10人前後で練習している。保存会会員は現在30人前後。笛太鼓27人ほど、踊り手が7人。夏休みに子供対象に週二回、火曜日と金曜日、9:30から10:00まで練習している。参加者は年々減っている。陸前高田市の広田町大陽（おおよう）地区から4年に一度の祭りで披露するからと教わりに来た例があり、教えたこともある。その方は熱心な人で毎晩夜通って習得した。現在では中才打ちばやしを伝承してあちらでも行われている。こうした交流はもっと昔にも頻繁にあったのではないかと思われる。

縁起については、国鉄職員だった岩井康一氏という笛太鼓、踊り、すべてに長じた優れた指導者がおり、由来などをまとめたものがある。以下岩井康一

氏の遺稿の全文である。

### 中才打囃子の由来

「中才打囃子」は気仙沼市の中心部より北東に位置する「東中才」と「西中才」の両地区に古くから伝わる伝統芸能であります。芸能伝承についての詳しい記録は残されていないが、古老師匠の言い伝えによれば、「祇園囃子」の流れを汲む打囃子と言われ、横笛の旋律は「笙雅」と言われる仮名文字で表された、{とうり、とらまい、うんずらまい、昇りとら、しし矢車、りどう、わたり、まつ囃子、けん（大漁節）、鞆鼓、おいとこ、さがり節、しこうろう、伊勢音頭、} など十四曲が継承されております。

一方、鹿折村当時の歴史によれば、「平泉黄金文化華やかなりし頃、良質の金が産出、馬と絹の生産が盛んだった当地は、気仙郡に通じる主要道だったことから、黄金などの産物を求め、旅商人や旅芸人等の往来が多かった」とあります。それらの旅人から伝承した芸能、「伊勢参宮」の折りに習得した「伊勢音頭」などの踊り、「伊達政宗公」が推奨したとされる能楽太鼓の撥捌きから「打囃子」を編みだしたものと考えられており、金の産出を祝って盛大に行われた。「山の神」祭りや、村の神社に奉納したのがはじまりと伝えられ、太鼓、踊り共に「保存会」の結成により、代々継承されてきた郷土芸能であります。

平成十年十月 中才打囃子保存会 演芸（笛・太鼓）指導部 岩井 康一

西村氏の記憶によれば、撥の担ぎ方などの所作から見て祇園囃子の影響があるともいうが、この記録では、撥捌きは、能楽太鼓の影響とある。

現在の若者のリーダーは岩井康一氏のオイにあたる。撥の担ぎ方などの所作から見て祇園囃子の影響があるともいう。それ以外は、『鹿折村誌』にいくらかのことは書いてあるので参考にはなるというが、『鹿折村史』には該当する箇所はない。

鹿折川の河口から数キロ離れたいわゆる上鹿折に

含まれる東西中才には、直接の震災被害は、言葉は選ぶ必要があるが、ないといってもよい。保存会会員一名（太鼓のたたき手）が仕事で海辺におり死亡した。物品被害もない。もちろん、直後はふだん練習会場となっている東中才一振興会館が避難所になったので通常通り、というわけにはいかなかった。避難してきた人々の生活のために練習道具を隅に片づけ、生活の邪魔にならないようにいくつかの配慮はしたようだ。一時は80人ほどの人がここに逃れてきていた。びしょぬれで寒いので、毛布を地域の人に寄付してもらって暖をとった。食事が一番困った。佐藤家は農業をしているので、150個の握り飯を作って持ってきた。玄米はあったが、精米する電気がないので困った。60個作ってきて半分ずつ食べてもらったこともある。

県からの被災状況についての調査も文書で来ている。

8月13日には鹿折地区復興祭盆踊りに出演した。9月の15日にもっとも近い日曜日に行われる鹿折八幡のオサガリのときには、神輿の後ろについてお供をする。八幡神社の祝詞ではお供する船の名前を述べ、木の札に船名を書いて船首に掲げて船団を組む勇壮なものだ。

カツオ船からカツオが祝儀として投げられ、木の札を海に流し、それを漁師が飛び込んで受け取る。それも楽しみだった。

みなとまつりにも参加するが、伝承しているのは伝統太鼓なのであわせるために若干違った叩き方をしなければならない。14曲伝承されているが、とてもすべてを演奏するような機会はない。

神輿について伝統曲と舞踊曲を中心に演じる。演奏者が担ぎ手となるので、結構つらい。トラックを山車に見立ててその上に子供を乗せ、主にお供の太鼓を子供たちにはやってもらい、お休みどころで担ぎ手が演奏する、というように工夫をしている。

柳樽を跨ぐなど、女性が嫌がる所作もある男の太鼓だったので、女性が入るようになったのは25年ほどまえから。

経済基盤は自治会からも出ているが、イベント収入のほうが多い。結婚式などに呼ばれたときに3万

円いただいて、ご祝儀に1万円差し上げるので2万円。帰ってきて打ち上げで結構使う。盆踊りのお花から分けてもらう。平成15年の「ふるさと創生」からもらった。経済的には困っていることはない。宝くじなどもあることは知っているが書類作成が大変なので現在は見送っている。

昔から鹿折八幡神社に奉納していたが、このあたりの打ちばやしは、もとは鹿折金山の山の神さまに奉納していたようだ。最近その鉾山付近には「歴史金山記念館」が10月に落成予定である。明治37年に「モンスターゴールド」が出たことが司馬遼太郎の本（『坂の上の雲』）にも出ている。昔、鉾山の仕事は命がけだったのでそこから神仏を頼む気持ちから始まったのではないか。はっきりは分からないがそのように伝えられている。「伊勢音頭」などという曲目もあり、ずいぶん旅の人が教えた形跡があるような印象を持つ。

白山小学校の子どもたちを中心に行われている白山太鼓（はくさんたいこ）も伝統太鼓である。曲目は多くないが、4曲ほど似ているものがある。少々汐も浪板も似たものがある。広く類似のものが伝承されているのではないか。

浪板にもともとあった飯縄神社や須賀神社の氏子の範囲のうえに、合祀の影響で二重に鹿折八幡神社の氏子としての認識ががぶさったものなのかは不明である。上鹿折はもともとは八雲神社の氏子でそこに奉納していたものが、合祀の影響で鹿折八幡神社に奉納するようになったのかどうか、それもよくわからないという。

上鹿折（日ノ口1、2と両沢地区）には、八雲神社（オテンノウサマ）という神社がある。現在は八雲神社には奉納はしていない。八雲神社の祭典は6月15日の近くの日曜日に行っていたが、震災後はオサガリはやめている。

昔は中才打ちばやしは、巡業にもよく行っていた。かつては岩手県まで行っていたと先代会長の村上清高氏が言っていた。彼は謡、太鼓、笛などあらゆる古典芸能の先生だった。

日ノ口1、2と両沢の3地区は、八雲神社の氏子でもあり、八幡神社の氏子でもある。したがってハチ

マンサマのトーマーのときには二回オサガリすることになる。6月15日前後がオサガリだが震災以後、行われていないし今年も見込みはない。佐藤家は屋号「白山」という旧家で、石川県から白山神社を屋敷神として勧請した関係で代々神輿の先ぶれに塩で清める「シオフリ(塩ふり)」係をつとめることになっている。父親を早くに亡くした佐藤氏は小学校のころからずっとシオフリ担当だ。トーマーで、順番が回ってきたときに役割を決める八幡神社オサガリとは異なり、八雲神社の場合は、テングや誰がシオフリかと役割が世襲で代々決まっている。八雲神社の別当は齋藤洋氏である。今年はオサガリはせず、境内で神事のみすで行った。ヤスミドコロがないので皆で神輿を拝む場所がない。本来八雲神社オサガリは、近いところでは100メートル先にオヤスミドコロがあるなど、八幡神社オサガリに比べるとオヤスミドコロの数が多い。残念ながらこの折りには、オヤスミドコロを特定するには至らなかった。

### 3. 八幡太鼓保存会 (7月13日19:00)

鹿折小学校から少し奥まった線路手前に常設の練習場を所有する八幡太鼓保存会は、数々の国際大会に出場し、むしろ気仙沼の外で有名な団体である。

歓迎していただいたが、「監督」と呼ばれる村上寿夫氏に主導権を握られっぱなしであり、独自の思想を語るのも、なかなか解説が難しい。われわれの聞きたい最低限のことも聞けたかどうか、はなはだところもとない。児童への教育を主眼にしているようであり、保護者の姿が多かったのみならず、保護者も活動にかなり主体的にかかわっている様子がみとれた。

菅原市長(当時)に村上氏が呼ばれ、国際交流親善団体を作るように要請されたことが設立のきっかけであるという。初めは野球、次はサッカーを題材に試みたが、うまくいかず、最終的に太鼓になったとのこと。子供に夢を持たせること、世界を意識することのために、元々あった芸能を復活させたという。

会に参加することによって、集中力の養成(端から端まで注意深く聞くため)と下半身の強化が期待

される。入会している子供たちは気仙沼全土から集まっている。練習施設は、寄付であり、太鼓の寄贈は、日本生命財団からなされている。

また、市からの寄付を求めたこともあったが、市教育委員会からは渋い声が返ってきた。剣囃子(伊達藩の戦勝の舞で、通り囃子は、「御輿が通る」の意で、神の行進曲)など。創作太鼓はやらないとのことであったが、明らかに創作の加味された演目が存在するようでもある。

練習日は、月曜日、水曜日、金曜日。水曜はビギナー対象で、ボランティアの大学生らも入る。国内のイベントのみならず、万博など、何回も海外で演舞を披露したこともある。東京都知事による震災支援の御礼のため、演武を披露する予定があるとのことであった。過去に新聞などで取り上げられたことがあったようである。

県(とくに教育委員会)に対しては、不満があるという旨の発言がいくつかあった。また、「気仙沼に郷土芸能はない」という発言があり、他団体に対しても少なからぬ敵愾心をもっているようであった。代表曰く、郷土芸能とは、「新しい文化を発信すること」であり、町作りの原点である。それ自体は正論であるが。

このあたりの「新しさ」と「伝統」をどう考えるか、という部分にこの「監督」率いる団体の哲学の根幹がありそうだが、今回はそれ以上追及することはできなかった。

### 4. 大島村上家唄上保存会 (7月14日10:00)

気仙沼湾を出港しておよそ30分ほど海路を進むと、大島にたどり着く。岸壁沿いに軒を並べていた土産物屋は跡形もなく流されて消えていた。

ここには、「大津波が来たら島は三つに分断される」という言い伝えが残されており、今回の東日本大震災でも実際に、島が三分裂するほどの大きな津波に襲われている。20メートル近い高さとなった津波は、島の中央部で合流して島を分断し、さらに島の南部でも合流寸前まで迫ったという。北部にある亀山では、津波の後に市を広域にわたって襲った火災により木々やリフトを焼失した。調査対象となっ

た村上氏宅にも浸水した。

大島で伝承されている大島村上家大漁唄上は、もとは屋号下屋敷を中心にそのシンルイ28軒で伝承されていたものである。現在の中心となっている村上家（屋号奥平）は下屋敷と本家・分家の関係にあり、ある時下屋敷で継承者が亡くなってしまい、それ以来奥平が継承の中心となった。この時、調査対象となった村上善之進氏が唄上を継承し、それに伴って唄上に用いていたカンバンを知人らに配布した。これを機に、保存会を設立したらどうかという話が持ち上がった。その後、1989年1月4日に保存会が正式に発足し、現在に至る。

カンバン（看裃）は、一般にはマイワイ（万祝）と呼ばれ、大漁を祝して船主から船方に贈られた「漁師の晴れ着」である。

その制作年により用いられる素材や縫い方が異なる。唐桑や気仙沼のものは「三丁格子」という三本の縦縞を基調として背に家紋、袖に大漁の文字を入れ、裾にとれた魚や波を手書きで加えたものである。

「保存会の構成はカンバンを配布された人たちによる。下屋敷のシンルイ28軒を含め、当時の気仙沼市長、村上氏の職場（市役所）の同僚や老人クラブ、また遭難した船の乗組員遺族の方や階上地区に住む兄弟、唐桑町の人間にも2枚ほど配っている。計45枚のカンバンを配布した人達が保存会メンバーシッポの範囲だった。

このカンバン制作の費用には、村上氏の退職金350万円が充てられた。村上氏がカンバンを配布しだしたのは1981年頃である。その後、1989年1月4日に保存会として立ち上げられた。

唄上で唄われるサイトコブシ（斎太郎節）は前唄、唄上、島甚句の3つで構成されている。唄上は1節唄われるごとに250匹の漁獲量を示し、2節まで唄われれば500匹、3節まででは750匹、といった具合に、古くは漁から戻ってきた船が陸で待つ人々に漁獲量を伝えるため、海上から唄われたものである。島甚句は宴会において披露されていた。

東日本大震災では、所有者のうち複数名がカンバンを流出した。配布されたカンバンは個人で所有し、中には寝間着として用いていた人も多く、震災に関

わらずぼろぼろだったものもあるという。

毎年2月に1回、会合が開かれる。活動で特筆すべきものは、1992年11月1日、市民会館にて披露。生涯学習フェスティバルにも参加。

今後の継承に関しては、そもそも震災以前から継承者となる人間がいないことが課題の一つであった。善之進氏の後継者となる息子は現在、海上保安庁の船に乗っており、大島を離れている。息子の年齢は40代で、退職までの約20年間、善之進氏から代替わりするような事態になった際、どうするのが問題となっている。保存会を立ち上げた時から、屋号下屋敷とそのシンルイ関係という規則が緩和されているので、そうした事態になった時には保存会会員の中で代役を務めてくれる人はいないか話し合われている。

新聞の切り抜きなど数点をいただいたが残念なことに一点をのぞき、年も日付も新聞の名前も書かれていないものが多かった。『気仙沼かほく』かと思われる。

## 5. 羽田芸能保存会（7月14日13:30）

市内でも山寄りに位置する赤岩羽田地区は、藩政時代には赤岩村とされ、西側の丘陵地帯から太平洋にそそぐ神山川に沿って、羽田、上羽田、四十二（しじゅうに）、水梨子（みずなし）の四集落から形成されている。庄司氏によれば、ここはパワースポットなのだそうで、なるほど至る所に祠や碑（いしぶみ）があり、それが看板の地図に記載されている。ここでは、畠山哲衛氏（84）と尾崎幹男氏が応じてくれた。『羽田神楽・羽田七福神舞』という印刷物を資料としていただいたが、印刷の日付はない〔羽田神楽保存会 n.d.〕。以下はその資料にもとづく。

藩政時代の村社である羽田神社では、明治末期に当地区の田畑（屋号）のハツエという人物（岩手県東磐井郡岩清水村から嫁いだという）が奥玉村の藤野金作、佐藤為定兄弟を師匠として招き、当時の若衆十名に神楽が伝授され、以来今日に至るまでそれが継承されてきている。羽田神社の別当尾形氏と、気仙沼九条羽黒大権現の菅原氏等が中心になって、近郷の八軒の旧山伏の家々が組んで法印神楽を行っ

たのがこの地方の神楽の始まりである。この法印神楽は法印たちによって独占され、一般人には決して伝承が許されなかった。羽田神楽は、神楽を愛好する者たちが、この地方の法印神楽と岩手県北部で広く行われている、山伏神楽を見真似聞真似したものをもとに作り上げた南部神楽の一種である。

1967年（昭和42）には当時議員であった佐々木徳二氏を代表として保存会が発足。会の母体となったのは羽田地区の小野寺家で、地区の住民のシムルイ・血縁関係に基づいていた。保存会では主に神楽、七福神舞、虎舞、そして打ち囃子を伝承している。初めは部落外には教えなかったが、保存会成立の当初には担い手不足もあって既にゆるめられ、学区範囲で募集を募るようになる。やがて羽田の芸能に共感してくれる人なら誰でも、とした。現在会員は37戸で、元から羽田に住んでいた35戸と、最近引っ越してきた2戸。羽田地区は全戸が保存会に加入している。地区自体が海から離れていて、高台になっているので、震災による被害はなかった。保存会の財源は各戸から年間で2000円の会費を集める。その他ご祝儀等で賄う。

羽田神楽では、鳥舞、四節分、三能退治、○（苑の下に衣）雲の大蛇退治、太刀納神話、日光権現悪蛇退治、竜神老松若松竜宮降り、一ノ谷二葉軍記、篠田が森葛の葉子別れ、安珍（一部）の演目がある。曲目は全部で二十三番あり、全曲目の演奏には二日以上を要するという。若い人は神楽の台詞を読めないため、今後の伝承には不安を抱えているという。

七福神舞は一説には文正元年室町時代（1446年）から三陸一帯で踊られていた大黒舞のひとつと伝えられる。大黒舞は浜では大漁唄い込みの中に、陸では正月の田植踊の中に組み込まれていた。島山さんと尾形さんの話によれば、明治40年には七福神は結成されていたがその後一時期伝承が途絶え、1998年（平成10）には再開された。

太鼓の総数は40くらい（古いものも含む）。神楽で使用するものと打ち囃子で使用するものの2種類が存在する。神楽用のものは計3つ（水梨小学校に1つ、保存会に2つ）。神楽に使用する仮面も25個ある。衣装も15組。

昭和55年ぐらいから水梨小学校で羽田神楽を教えている。

毎年のみなと祭りに参加（昭和26年（1951）より）し、一回も休んでいない。1977年（昭和57年）、県民会館にて公演。

打ち囃子では、通り囃子、虎舞、うんずら舞、安波囃子、かっこ、剣ばやし、りどう囃子、ししやくるま、わたり、虎舞、昇り虎、さがりぶしの全12曲を伝承する。虎舞と打ち囃子は、若者が結婚式などの余興で披露するものである。

羽田地区は市内でも西側の、丘陵地に位置するため、震災による被害は皆無といっている。しかし、直接的な被害がなくとも間接的な形で影響を受けている。後述する羽田神社のオサガリは、津波による被害の影響で巡幸順を一部変更しなければいけなくなった。

## 6. 大石倉芸能保存会（7月14日15:30）

羽田地区と隣接する赤岩大石倉地区でもまた、津波による直接的な影響は皆無であった。ここでは、高橋正勝氏（64）が対応してくれた。

当地区に保存会が成立したのは1974年（昭和49）のことであった。青少年の育成、ならびに伝統文化の継承を目的に結成され、大石倉の地縁・血縁関係に基づいた会員構成で、自治会の組織内に組み込まれている。多い名字は熊谷、佐々木など。現在会員となっているのは20名ほどで、初期は大石倉地区内の人間のみに限っていたが、近年では会員数の減少に伴い地域を広げて会員を募っている。かつての会員は今ではOBとなり、現在は小学生から高校生までの幅広い年代の子供を会員として募集し、隣の水梨学区の子どもも歓迎するなど、後継者を募っている。また、保存会と同じ位置づけである子ども育成会（保護者会とは別組織）も子どもたちに太鼓を教えている。2012年まで文化庁委託事業「伝統文化子ども教室」の事業採択を請け「子ども教室」を開設した（受講料はなし）。

保存会のメンバーで被災した人はいないが、職場が無くなってしまった人はいる。また、現在、修理中の大太鼓が一つあったが、震災の影響で損失して

しまった。

活動資金は、自治会費各戸5千円であり、子供たちから受講費は徴収しない。後は、みなとまつり時の御祝儀などである。活動資金を増やすために、助成金の応募などは積極的に行っており、現在文化庁の事業に採択されている。今年で5年目になり、今年後も継続出来るのであれば、継続したいと思っている。

みなとまつり打ち囃子大競演演奏曲は、「通り囃子」「安波囃子」「うんずら舞」「昇り虎」「剣ばやし」「海潮音」である。その他の伝承太鼓演奏曲は、「かつこう囃子」「おいとこ」「わたり囃子」「りどう囃子」である。

なお、大石倉にも神楽はあったが、今では途絶えている。田植え踊りも存在する。また、伝承曲には踊りが付随するが、現在は伝承されていない。踊り手は男性であった。

天明のころ、大滝大明神へ五穀豊穰祈願に奉納されたのが始まりと伝えられているが、現在の打ち囃子は、岩手県陸前高田方面から、明治時代後半に田植え踊りと共に伝承されたものである。

主に6月～12月まで練習並びに演奏活動を行う。週に1回、金曜日が練習日になる。活動自体は年間を通してある。練習は毎週金曜日である。行事が近くなってくると週2～3回行う。

大太鼓12台、小太鼓20台、肌襦袢を保有。みなと祭りの打ち囃子大競演に参加。松岩地区つまり、大石倉、羽田、水梨子、カネトリ、前田でおこなわれる盆踊りでも披露。他に、チャリティーショーや盆踊りの時に披露。八瀬スローフード・フェスティバルにも参加。大滝大明神や羽田神社への奉納はしていない。高橋氏曰く、「神社には神様がいない」とのこと。

抜きバチ（太鼓を叩く動作をするが、太鼓は叩かない）が特徴的な演武である。

かつて信仰の対象として羽田神社や他の神社仏閣に奉納目的の信仰に根ざした活動があったかどうかはわからない。あったかもしれないが忘れられている。現在、羽田神社に神楽は奉納していない。

## 7. 松園虎舞保存会（7月14日19:30）

我々が聞き取りを行った7月14日は、松園虎舞の練習日であった。調査の場となった松園地区会館では、震災前と変わらぬ虎舞の練習風景があった。対応してくれたのは梶原幸博氏。

現在の名称の保存会は、1981年（昭和56年）7月に、前身となった虎舞舞踊団（戦後まもなく結成）から虎舞保存会となる。結成理由は人員不足によって保存がままならなくなり、門戸を広げたかったため。最初「帟舞講中」で、「松園虎舞舞踊団」となり、「松園保存会」となった。松園とは、屋号のことで、保存会のつながりは、最初は血縁であり、奉納が演舞の舞台であった。戦後、講中から舞踊団となった際に、団体の規模が広がり、さらに松園保存会となった際に、松園地区まで参加資格の門戸を広げた（門戸の拡大にあまり抵抗は無かった）。松園虎舞のルーツは畠山家（屋号：松園）にあるという。この家の血縁者のみで、御崎神社に奉納していたものが始まり。御崎神社の氏子でメンバーが構成されていた。

松園地区の戸数の約150戸が会員に入る。ただし、その全員が演武を行う訳ではない。また、保存会には、かつては男だけで60人くらいいた。人数の多かった時は、太鼓の代わりに竹を叩いて練習した。今では30人ほど。ここ10年ほどで女子も入会するようになってきている。もともとの加入条件は松園地区の人間であること。保存会会報によると、保存会は少子化に伴い、平成20年度より中井小学校を通じて会員募集の広告を出し会員を増やす活動をおこなっているという。自治会員＝保存会会員となっている。会長の選出は、自治会長が、副会長（2、3人）のうちから一人を保存会会長に指名する方式である。

保存会で、震災のために亡くなったのは1名。住宅の被害は1棟。幼稚園で避難（1週間）し、その際に炊き出しも実施した。地区自体が海からせり上がっているため、被害は比較的少なくて済んだ。

松園地区の150戸からそれぞれ年間1000円の会費を集める。総額15万円。他に、発表した際のご祝儀がある。交通費等遠征の際にかかる諸経費は主催者側から。助成金（宝くじ）の申請も行っている。

「通り囃子」「剣囃子」「松囃子」「大漁節」「新松

囃子」「里道」「虎舞」「下がり囃子」「道中囃子」「おいとこ節」の10曲を伝承。現在は演奏時間が15～40分程度であるが、演奏時間が無制限だった頃は演技演奏が約20曲あり、現在は伝承されていない「伊勢音頭」「矢車」「カッコウ」といった曲が存在していた。また、当時の流行曲などを編曲し取り入れていたようである。

「松囃子」は、同名の祭りの流れを組んでいる。「里道」は、岩手陸前高田の田植えと思われる。「通り囃子」は、気仙沼市の通りか。「安波囃子」は、茨城に同じメロディを用いた祭りがあり、そこからの流用と思われる。「虎舞」は、波板の「のぼり虎」。「うんづら舞」は、運連なる舞の意で、七福神をまつる舞である。「剣囃子」は、正月にやられていた縁起の良い舞。「剣囃子」と「かっこう囃子」の太鼓をたたければ一人前と言われていた。「はしご虎舞」の虎の口（棒が1本あるのみ）は、手首の返しで開閉する。なお、現在では「おいとこ節」が伝承されなくなっている。教わった先生が亡くなってしまい、次の先生も亡くなってしまったためである。話者の藤原氏は「おいとこ節」の笛を吹くことができるが、太鼓はたたけない。そのため、練習に盛り込むことができないという。

虎舞の起源については、300年前に起こった伝説が口伝によって伝えられてきた。正徳二年頃（1712）に出港した船が暴風雨のため消息を絶ち、その安否を気遣って3日目に1匹の虎斑の猫が現れ、通り過ぎて消えていくとやがて船が寄港し、以来虎のご加護のたまものであるとし虎舞を奉納することとなったというものである。

『松園虎舞保存会会報』によると1889年（明治22年）松園地区の島山八之助氏が岩手県気仙郡熊野神社の奉納虎舞を見物して帰り、伝えたのが起源とされる。末崎虎舞（現・平組はしご虎舞）の師匠を招いて伝習した。なお、末崎町誌にも明治23年に本吉郡唐桑町へ伝えたとの記述がある。1895年（明治28年）、帛舞講中として尾崎神社に奉納した際、額を取めている〔松園虎舞保存会 2010〕。

練習は、6月～8月の盆の時期くらいまでで、基本は週2回（火曜、土曜）。本番が近くなると週3、4回

になる。今年は、毎週火曜日と土曜日に練習している。連取場所は地区会館。なお、会館使用料は1回2100円かかっている様子である。

2009年には宝くじ財団からの助成を受け、衣装を新調している。新調された衣装は、大太鼓用に赤色の長袴纏。小太鼓用に濃紺の袴纏。踊りには鮮やかな緑の袴纏。笛吹き衣装に、袴纏と黒股引、黒足袋。2009年に衣装を新調した際、太鼓も増基している。練習時に並べられたものを数えた限りでは、少なくとも、大太鼓11、小太鼓22が現存している。これが2009年当時に増基された物かは不明。

70年以上前に作られた虎頭がある。あごの部分とその上に軸となる材木を置き、その上から和紙の張子、漆で固める。製作者は3名ほど（存命なら90歳ぐらい）。保管はしてあるが、張子に穴が開いてしまい使用不能。

発表の機会は、尾崎神社への奉納。7月29日の保健福祉センターでの披露。毎年実施されるリアスカき祭り。みなと祭り。その他、結婚式等祝い事の際に依頼が来ることもある。年間5回ほど発表。その他、1991年（あるいは92年）に岩手県釜石で開かれた全国虎舞フェスティバルにも参加した。（以下次号掲載予定）

別表 2012年度調査対象一覧

調査日	時間	調査対象	場所
7月13日(金)	11:00	気仙沼市教育委員会教育委員長	気仙沼市役所
	13:00	中才打ち囃子保存会	東中才一振興会館
	19:00	八幡太鼓保存会	
7月14日(土)	10:00	大島村上家唄上保存会	気仙沼市大島
	13:30	羽田芸能保存会	赤岩羽田
	15:30	大石倉芸能保存会	赤岩大石倉
	19:30	松圃虎舞保存会	唐桑松圃地区会館
7月15日(日)	10:00	尾崎大名行列	松岩面瀬・仮設住宅
	13:00	平磯芸能保存会	本吉町平磯
	14:30	大谷大漁唄込保存会	本吉町大谷
8月5日(日)	11:00	気仙沼市教育委員会教育長	気仙沼市役所
	13:00	大島神社・小松宮司	大島神社
	14:00	磯草虎舞保存会	大島磯草
	15:30	要害七福神舞保存会	大島要害
8月6日(月)	14:00	東北学院大学ボランティアセンター 座談会聴講	御崎荘
8月7日(火)	17:00	只越芸能保存会	唐桑町只越
8月8日(水)	10:00	八雲神社例大祭	東中才一振興会館
11月23日(土)	10:00	八雲神社例大祭	東中才一振興会館
11月24日(日)	9:30	鹿折八幡神社・斉藤宮司	鹿折八幡神社
	14:00	早稲谷鹿踊保存会	八瀬地区早稲谷
11月25日(月)	9:30	古谷館八幡神社・熊谷宮司	古谷館八幡神社
12月29日(土)	11:30	気仙沼市教育委員会教育委員長	気仙沼市
12月30日(日)	9:30	佐藤仁一氏宅	唐桑町中井
	10:00	尾形健氏宅	小々汐

資料1 八幡神社別当の系譜

<現八幡神社(常覚院)一中永山八幡寺、山田八幡社、山岸愛宕社>

初代	千住坊秦永	十一世	常覚院忠永
二世	左京坊廣永	十二世	長覚院春永
三世	治門坊忠親	十三世	常覚院忠賢
四世	善覚坊賢永	十四世	常覚院亮永
五世	大行院鎮永	十五世	常覚院泰賢(明治23年)
六世	園行院則永	十六世	良善院(小松熊雄)つなぎ
七世	大覚院了永	十七世	常覚院富雄(昭和17年)
八世	文殊院忠真	十八世	漢
九世	長覚院清永	十九世	陽一郎
十世	大覚院源永		

資料2 八雲神社別当の系譜

<現八雲神社(婦命院)一慶廣山東光寺>

東家(婦命院)齋藤氏の由緒『安永風土記』に記載あり。

初代	永心	八代	円松	十五代	真直
二代	永俊	九代	慶信	十六代	徳三郎
三代	円心	十代	慶心	十七代	富三郎
四代	応信	十一代	体鎮	十八代	富雄
五代	応心	十二代	体元	十九代	漢
六代	正応	十三代	覚道	二十代	陽一郎
七代	正永	十四代	泰賢	二十一代	勇太

## <注>

- ① 正式名称は、「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」なお現在この事業により調査された資料は報告書があり [高倉2012,2013 (印刷中)], インターネットを通じてダウンロードできる。URLは, <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/takakura2/shinsai/home.html>[2013年10月3日閲覧]。また, 同じ資料を用いたデータベースが構築中である。
- ② 梅屋は, 震災前に18回気仙沼市に訪れた経験があった。
- ③ かつて栄えた「井戸端網」という漁網とともに, この屋号は広く記憶されている。
- ④ 梅屋 [2012a: 254]。
- ⑤ 社交辞令をどこまで真に受けてよいかはわからないが, この機会にいままで調査の及ばなかった点についても明らかにしたいとの思いもあったとのことである。

## 参考文献

- 相澤卓郎2012, 「S-4 気仙沼市階上地区」, 高倉浩樹 監修『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2011年度報告集』東北大学東北アジア研究センター, 267-268頁。
- 相澤卓郎2013, 「「遊び」としてのカツオ節業再建—水産加工のマイナー・サブシステム論」東北学院大学震災の記録プロジェクト, 金菱清 (ゼミナール) 編『千年災禍の海辺学—なぜそれでも人は海で暮らすのか』生活書院。
- 相澤卓郎・小谷竜介2012, 「S-5 気仙沼市鹿折浪板地区」高倉浩樹 (監修)『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2011年度報告集』東北大学東北アジア研究センター, 269-270頁。
- 梅屋潔2012a, 「遠くから私が気仙沼にこだわるいくつかの理由—「ドキュメント」のひとつとして」『震災学』第1号, 東北学院大学, 249-278頁。
- 梅屋潔2012b, 「S-1~3, S-6~8 気仙沼市鹿折浪板地区」, 高倉浩樹監修『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2011年度報告集』東北大学東北アジア研究センター, 254-266, 271-277頁。
- 梅屋潔2013, 「S-1 気仙沼市鹿折浪板地区」, 高倉浩樹

- 監修『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2012年度報告集』東北大学東北アジア研究センター。
- 気仙沼市史編纂委員会1994, 『気仙沼市史Ⅶ 民俗・宗教編』気仙沼市史編纂委員会。
- 気仙沼市史編纂委員会 1998, 『気仙沼市史Ⅸ 補遺編 スポーツ・芸術』気仙沼市史編纂委員会。
- 佐久間政広・梅屋潔・金菱清 (編) 2008, 『気仙沼に学ぶ—2007年度地域構想学発展実習 (地域社会コース) 報告書』東北学院大学教養学部地域構想学科。
- 高倉浩樹 (監修) 2012, 『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2011年度報告集』東北大学東北アジア研究センター。
- 高倉浩樹 (監修) 2013 (印刷中), 『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2012年度報告集』東北大学東北アジア研究センター。
- 太宰幸子 2001, 「唐桑地方の踏査報告」『ちめい』第15号, 69-71頁, 宮城県地名研究会

## 資料等

- 羽田神楽保存会 n.d,  
『羽田神楽・羽田七福神舞』
- 松圃虎舞保存会, 2010,  
『松圃虎舞保存会会報』
- 「絆—和船カツオ漁業史勇壮さと喜び熱唱」『気仙沼かほく』平成12年8月24日, 頁等未詳。